ふれあい市は"地産地消"の原点

輸入農産物が年々増加する一方で食品の偽装表示や外国からの輸入野菜の残留農薬の問題など、今、私たちの「食」を取り巻く安全性が大きく取り上げられています。

このような状況の中で、鳥取市では地産地消（地元の産物を地元で消費する）の取り組みを県や農協などと一緒になって進めています。今回の市報では、市内で生産された新鮮な野菜を販売している「ふれあい市」を紹介するとともに、取材をとおして生産者の思いをお伝えします。

"新鮮で安全・良質"は生産者の思い

鳥取市内で、最も早く開設された「松保ふれあい市」を取材しました。

この日は、午前七時半ごろから朝採れた農産物が次々に搬入されてきました。天気がよいので作物は駐車場に並べられています。八時の売り出し開始と同時に待っていたお客さんがお目当ての商品に殺到。約二十分でほぼ売り切れになってしまいました。

「今日は、交流している日進地区への出荷もあり、品数は少なめです。お客さんは、近所の常連の人がほとんどです。」と代表者の大西英俊（おおにしひでとし）さん（布勢・六十四歳）は苦笑い。

「松保ふれあい市は、農協の婦人部が中心となり、昭和六十一年に開設しました。現在の会員数は二十人。最初は、